

藤枝市史だより



第 4 号 平成13年2月26日発行
編集・発行 藤枝市郷土博物館
管理課市史編さん係
〒426-0014
藤枝市若王子500 (蓮華寺池公園内)
TEL 054 (645) 1100
E-mail
fujieda-muse@ny.tokai.or.jp

縁生論

於中無明行渴愛取有是為集諦識名色六
入觸受生老死是為苦諦彼等十二分滅是
為滅諦若於縁生如實能知是為道諦

維神護景雲二年歲在戊申五月
十三日景申弟子謹奉為
先聖敬寫一切經一部工夫之在
嚴畢矣法師之轉讀盡焉伏願福
山之風輟向蓮場而鳴鑾紛水之
龍跡隨香海而留影遂披不測之
了義永證弥高之法身遠暨存亡
傍周動植同茲景福共休禪流咸
發素田敬作頌曰
非有能仁誰明正法惟朕仰止給
備慧業推門利廣予歡若知力用
妙子登岸敢對不居之歲月式垂
因極之頌翰

一二〇〇年前の写経

紙本墨書
「縁生論」

原の清水さんは、山号を音羽山といいま
す。そういえば、静岡市の清水寺へは静鉄
の音羽町駅で降りるし、京都東山の清水寺
も音羽という場所にあり、音羽の滝や音羽
焼が有名です。いずれも観音信仰の霊場で、
原の清水寺の本尊は厄除千手千眼観世音菩
薩、駿河三十三所巡礼の第一番札所となっ
ています。

さて、清水寺にはここに紹介する「縁生
論」という貴重な資料があります。

縁生とは縁起によって生じたものをさし
ます。縁起は、今日一般的には「縁起をか
つぐ」といったふうに使いますが（この場
合は、吉凶の前兆という意味、迷いが何に
よって生じるのかは、仏教の世界観・人間
観にあつてとりわけ重要な概念です。「縁生
論」は冒頭に三十の頌（韻文）を掲げ、続
いてそれを一行ずつ引用して解釈する形式
をとっています。竜樹の著作を贅擲迦（聖
者とみえますが、詳細は不明）が増補した
ものです。

「縁生論」一卷は紙数九紙ですが、『大正
新脩大藏經』に収められた「縁生論」を参
照すると、第十二頌の解釈の一部から第二
十五頌の解釈までの該当箇所が見当たりま
せん。第五紙と第六紙との間、紙数にする
とちょうど四紙分に相当するものです。

写真は尾題と奥書の部分です。神護景雲
二年（七六八）五月十三日の日付があり、

仏弟子（称徳天皇）が先聖のために一切経
一部を書写し、經典の装丁を終えたと思え
ます。橋山は中国古代の帝王、黄帝が葬ら
れたという場所。先聖を黄帝になぞらえ、
大乘の教えを披き、仏法を悟った真身を証
明して、大きな幸いとめぐみをとともにせ
んことを願うとしています。この奥書によ
り、この「縁生論」が景雲経と呼ばれる勅
願経のうちの一卷であることが判明します。
光明皇后発願の五月一日経と並んで奈良時
代を代表する經典群です。

景雲経は、東大寺の尊勝院内に建てられ
ていた聖語藏という経藏に収納されていた
もので、大仏殿の修理費用を得るために、
明治二十六年（一八九三）、正倉院の構内に
移されました。この正倉院聖語藏には同じ
奥書をもつものが四卷あり、他に石山寺や
五島美術館などに所蔵されています。

奥書の先聖を父である聖武天皇とするか、
先帝である淳仁天皇とするかは意見が分か
れるところですが、道鏡を寵愛して仏教政
治を進めた称徳天皇が亡くなるのはこのわ
ずか二年後のことです。

東大寺から流出した景雲経は約五十巻が
知られています。この「縁生論」は奥書を
有する数少ない例の一つとして、昭和三十
一年、県の文化財に指定されています。

（文／古代担当調査委員 佐藤正知）

歩兵第三十四連隊の激戦地

—上海—を訪ねて

近現代担当
市史専門委員

きたはら つとむ
北原 勤



今回撮影した蘇州河渡河作戦地付近の様子

市史の大きなテーマに、満州事変から始まる十五年間の戦争の時代があります。一九三一年の柳条湖事件から始まった戦争は中国側の激しい抵抗戦争に直面し、戦況はきわめて厳しいものとなりました。この時代、郷土出身兵士の多くは静岡にあった陸軍歩兵第三十四連隊に属しましたが、戦争の全期間を通じて様々な作戦に投入され、多くの犠牲者を出すこととなりました。

さて、昨年夏、近現代担当では、歩兵第三十四連隊にとって最大の激戦地といえる第二次上海事変（一九三七年八月～十一月）に関する現地調査を行いました。『歩兵

第三十四連隊史』（以下『連隊史』）によれば、この戦闘に投入された第三十四連隊は連隊長田上八郎大佐以下三八〇〇名、戦死者一二五八名、戦病死者六二二名、戦傷者二一四二名とあります。損耗率九〇％に達する大激戦であり、郷土出身兵士も五八名がこの戦闘の犠牲者となりました。今回の調査目的は、『連隊史』の記述を手がかりにして現地を確認してみようということです。

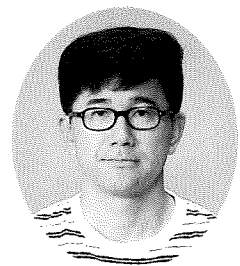
第三十四連隊は長江（揚子江）と黄浦江の合流点に近い呉淞で上陸作戦を敢行し、その後揚行鎮、劉家行、蘆藻浜クリーク、大場鎮の激戦を戦い、蘇州河渡河作戦を経て上海市内に突入します。これら激戦地は現在ほとんど巨大都市上海の郊外となり、呉淞や揚行鎮辺は工業地域、大場鎮辺は住宅地域となっていますが、劉家行辺は農業地域として当時の景観を留め、『連隊史』の挿絵の風景と重なる部分が多くあります。特に縦横に走る多くのクリークは、『連隊史』のクリークを巡る戦闘の記述を彷彿させてくれました。短日時の調査でしたが、現地ガイドを紹介して土地の方々に話を聞きながら、

『連隊史』の記述や略図と現況とを見比べる作業はなかなかスリリングな作業でした。調査の成果は今後の市史編さんに生かすこととしますが、今回の調査は近現代史を学ぶうえで、現地を訪ねること、関係者の話を聞くことの大切さと面白さを再確認させてくれた旅でした。

最後に、蘇州河渡河作戦で戦死した横内出身の松田庄作伍長に関する『横内四百年史』の記事を紹介しておきます。

「（略）昭和十二年日中戦争が勃発すると、同年十月八日静岡歩兵第三十四連隊に応召され再び軍務についた。十月二十二日には静岡を出発し二十七日は中国上海に上陸し直ちに蘇州河付近の戦闘に参加した。（略）中国軍はこの河のほとりに堅固なトーチカを築き頑強に抵抗を続けるため日本軍と激しい戦闘になった。昭和十二年十一月一日早朝、日本軍は対岸の中国軍に激しい総攻撃をかけ蘇州河を渡り始めた。敵弾が雨あられの如く飛び交う中、松田君は少しも退かずひるまず渡河中、惜しいかな迫撃砲が命中し異国の空の下で命を落とした（略）」

地域を見つめよう



藤枝市立藤枝中央小学校 教諭

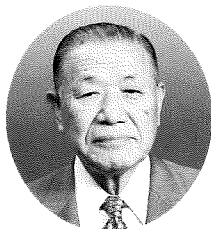
あきはら むつみ
浅原 睦

志太平野が一望できる荘館山の古墳。今も昔も子供達の水遊びのメッカ瀬戸川。そして新たな歴史づくりを感じさせる東海道宿場町。私が勤める藤枝中央小学校の学区には、歴史のたたずまいを感じさせる場所が数多くあります。また、藤枝大祭には、多くの子供達が参加し、地域の人達との交流の場にもなっています。そんな中、新学習指導要領の改訂にともない、今学校では、子供達の生活舞台である地域を見つめ直し、地域のよさを再認識する視点へ移行してきています。それだけに地域の魅力を満載した市史への期待は大きく膨らんでいきます。歴史が目に見えるわかりやすい資料・写真等は子供の調べ学習にもきつと役立つことでしょう。同時に、私自身もそんな市史を学び活用する一人にならなくては・・・と思います。藤枝を心のふるさとに感じる人を目指して・・・。

調査協力員の紹介

市内担当地区で資料の所在調査や収集を行っています。計20名で構成し、前号に引き続いて10名を紹介します。皆様のお宅に江戸時代の古文書、明治から昭和にかけての書類、日記、写真などがございましたら、お気軽に調査協力員または市史編さん係へご連絡ください。

藤枝地区



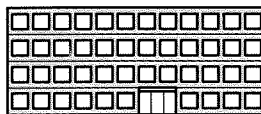
つかもととし
塚本元二



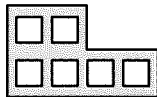
おおつかへいじ
大塚平璽



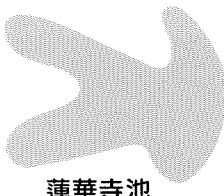
やぎ つとむ
八木 務



藤枝北高校



郷土博物館



蓮華寺池

瀬戸川

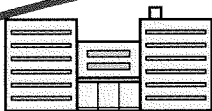


たけいもりよし
武井守義



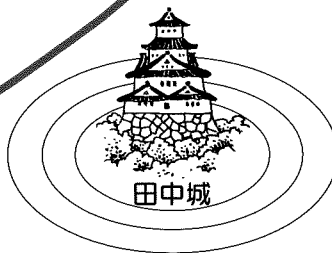
ほりえじゅういち
堀江重一

西益津地区



市役所

国道1号線

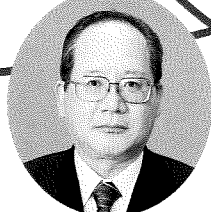


田中城

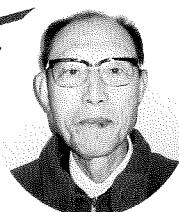
青島地区



やぎ いちろう
八木一郎

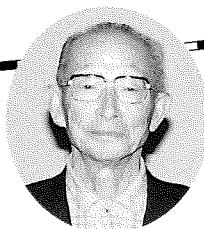


なんじょうちゅうぞう
南條忠義

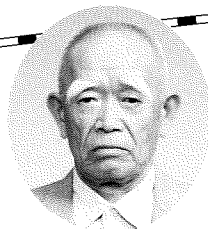


たなか しげる
田中 茂

高洲地区

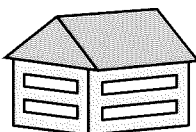


すぎい しろう
杉井四郎



ふかだ きじゅうろう
深田喜十郎

藤枝駅



市民体育館

かわらばん

一緒に「藤枝」を学びましょう

『藤枝市史研究』第2号
市史叢書4『瀬戸谷村誌』（復刻）を刊行

市史編さん事業の研究成果をまとめた『藤枝市史研究』第2号を刊行しました。11年度に開催された野本寛一専門委員（近畿大学教授）による講演会記録「日本民俗の古層をさぐる―藤枝・その年中行事から―」や王生芳樹調査委員（県立静岡高校教諭）による論文「江戸時代中期における地方俳諧の位相―雑俳を中心として―」などが紹介されているほか、奈良・平安時代の国司、武田・徳川両氏の攻防と城郭、岡部宿の謎、木町区有文書についての調査報告が収められています。

大正2年（一九一三）に手書きで作られた「瀬戸谷村誌」は、当時の村の様子がうかがえる貴重な史料で、今回読みやすいよう活字化して復刻しました。もつとわかりやすい現代の表現に改めて刊行してほしいという声もいただきましたが、当時の人の考え方などをそのまま示すことが史料として価値があるものと考え、あえて手直しはしませんでした。

『藤枝市史研究』第2号・『瀬戸谷村誌』はいずれもB5版、価格は八〇〇円、郷土博物館で販売しています。

☆『藤枝市史研究』第1号（八〇〇円）・『広幡村誌』（八〇〇円）・『大洲村誌』（一、〇〇〇円）も郷土博物館で好評販売中です。（稲葉村誌）はおかげさまで完売しました。）

市史学習会

とき／3月17日（土）午後2時〜4時
ところ／生涯学習センター 第1会議室
テーマ／「古代社会成立前後の藤枝―考古学から見た藤枝のあけぼの―」
講師／篠原和夫氏（市史編さん専門委員・静岡岡大学人文学部助教授）

募集人員／90人
入場／無料
申込方法／3月1日（木）から電話で郷土博物館へ

考古

助宗から大量の土器を発見

助宗古窯の調査

考古担当調査委員

柴垣勇夫

藤枝市の古代史を語るとき、見逃せないのが藤枝市北部の助宗の地に数多く造られた古窯跡の存在です。この古窯跡群は、昭和五十四年に分布調査が実施されて、奈良・平安時代の古窯跡が約一〇〇基あることが判っていました。でも、どのような構造の窯で焼かれたのか、焼かれた器種の全体像はどうかなどが不明でした。市史ではこの古窯跡群でどんな製品が焼かれ、どの地域に供給されていたかを調査し、古代の藤枝が東海地方でも有数の窯業地であったことを明らかにしようと考えています。考古担当では、昨年度行った分布調査の結果から、灰原（焼成の際に掻き出した灰と、焼き損じの器が堆積しているところ）が残っている土地を選び、試掘調査を行って、窯本体を推定することにしました。

調査は、平成十二年九月一日から九月七日まで、藤枝市助宗の細谷Bb地点にトレンチを設定して実施しました。静岡大学人文学部考古学研究室の院生、学生が中心となり、長さ一六メートルのトレンチを五メートルごとに区切って順次掘り下げ、明瞭な灰原を確認することができました。中央のトレンチがもつとも厚く灰層が堆積していて、この上方に窯本体があると推定できました。また遺物には杯と呼ぶ食器のほか、三足のついた円面硯や陶鍾、長頸瓶、短頸壺、甕などが出土しました。出土の須恵器には、八世紀前半と八世紀後半のものがあって、これまで知られていたよりやや古いものも焼成されていました。詳細な検討はこれからですが、窯道具もあって、貴重な品物が多く焼かれたことも判りつつあります。



助宗古窯出土の須恵器

上は長頸瓶、下は左から円面硯・陶鍾・杯身と蓋

ハートをこめて
市史の調査に取り組んでいます

中世

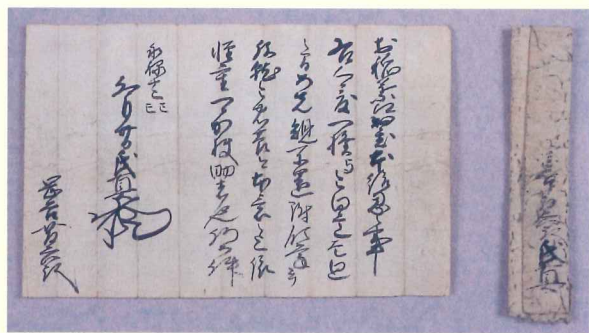
武田信玄を悩ませた稲葉郷の岡谷家

中世担当調査委員

前田利久

堀之内の岡谷旭家には、戦国時代に駿河・遠江・三河の三国を治めた今川氏真が、永禄十二年（一五六九）四月二十日に稲葉郷の土豪（地侍）岡谷藤六に出した特殊な判物が伝わります。氏真は前年の暮れに武田信玄に駿府を逐われて掛川城に逃れると、今度は遠江に進攻した徳川家康によって包囲されてしまったのですが、この文書は籠城する掛川城から出されたものです。特殊というのは、大きさが今川氏の通常の文書に比べて四分の一にも満たないことで、さらに縣紙と呼ばれる包み紙とともに折り目に合わせて元の形に折り直すと、八・〇×二・七センチメートルという極小サイズとなり、まさしく密書として作られたことが想像できます。

当時の駿河は、信玄が破竹の勢いで駿府を占拠したものの、直後に氏真夫人の実家である相模の北条氏の援軍に興津川以東を押さえられ、高草山以西の志太地域には今川の家臣が残っていたため、信玄は駿河の中央に閉じ込められて身動きが取れない状態でした。雪が解ければ、越後の上杉謙信が信玄不在の信濃・甲斐へ進攻することが予想され、まさに信玄の生涯のなかでも絶体絶命かと思われた危機でした。さらにそんな時、安倍川上流の山間部各地で、今川家に仕えた土豪たちによる一揆が発生し、地の利を心得ている彼らは、ゲリラ的な戦術によって駿府の武田勢を悩ませました。岡谷藤六に届けられた密書の内容は、岡谷氏が一揆に加わって奮戦したことを褒め、褒美としてこれまでの領地の保証はもちろん、駿河を奮闘した際には戦功に応じた恩賞を与えるという、弱小の土豪を激励するものでした。この結果、信玄は久能山と興津に兵を残し、庵原の山中を苦勞しながら抜けて甲斐へ撤退しました。この文書が出された四日後のことです。



今川氏真判物（14.5×23.1cm）

岡谷氏がこの一揆に加わったものか明らかではありませんが、この密書が徳川勢の包囲網をくぐり、大井川を渡り、山中を抜けて岡谷氏に届けられたことを思うと、小さい文書ながら大きな緊張が伝わってきます。このような文書は大変珍しく、包み紙とともに当時のまま残されている点も貴重な史料と言えます。